

都城の土器とその定点

ここまで、古墳時代の土器（主に須恵器）について、各段階の時期の定点をおさえてきました。ここからは、古墳時代に続く飛鳥時代の土器をみていくことで、7世紀代の「ものさし」を把握していきましょう。ここにおいて、特に注目される器種は、土師器および須恵器の坏です。

土師器では、広い平底で口縁端部が分厚かったり、丸くおさまるタイプの坏（専門用語で坏A）と、小さな平底ないしは丸底で、口縁端部が内側に傾くタイプの坏（坏C）があり、どちらも深手から浅手へと変化していきます。

須恵器では、古墳時代以来の坏（坏H）が大きいものから小さいものへと変わっていき、つまみをもつ蓋とセットになる小型の坏（坏G）や、高台の付く坏（坏B）が出現します。こうした土器様相を5段階に区分して、型式学の考え方を使いながら、飛鳥Ⅰから飛鳥Ⅴという相対編年（飛鳥編年）が作られています。